田中雅一・奥山直司 編
『コンタクト・ゾーンの人文学 第IV巻 ――Postcolonial ／ポストコロニアル』

晃洋書房、2013 年、4,100 円＋税、xx＋285 頁

Andrea De Antoni（アンドレア デ・アントーニ）

本書は 2006 年 4 月から 2010 年 3 月までの 4 年間、京都大学人文科学研究所で行われた共同研究会「複数文化接触領域の人文学」における報告と、2007 年から同研究所人文学国際研究センターが発行している『コンタクト・ゾーン』誌に掲載された論文を中心に編まれた論文集シリーズの最終巻にあたる。2011 年から現在までに出版された本シリーズは、それぞれ「問題系」、「物質文化」、「宗教実践」というテーマで 3 巻が発行され、第 IV 巻となる本巻は「ポストコロニアル」をテーマとしている。

本シリーズが軸としている「コンタクト・ゾーン」という概念は、メアリー・L・プラットが『帝国のまなざし――旅行記とトランスカルチュレイション』（Imperial Eyes: Travel Writing and Transculturation, 1992）の中で提唱したもので、本論文集の編者の 1 人である田中雅一が紹介するように、「人と人との接触（コンタクト）によって生まれる場所（領域、ゾーン）」（p. i）を指す。ただし、本書においては「異なる文化背景を有する人々の接触が生じる領域」（p. ii）として位置づけられている。

つまり、「コンタクト・ゾーン」とは、一方で本質主義に関わる、単なる「異文化交流」ではなく、異なる文化背景をもつ当事者同士の主体的な作用・交渉によって生じてくる領域である。他方で、このように位置づけられた「コンタクト・ゾーン」は、「異文化」のみならず、「アイデンティティ」や「他者」という概念と密接な関わりをもつようになる。いうまでもなく、「異なる文化背景」を理由に「コンタクト・ゾーン」という概念を限定しなければ、何を「コンタクト・ゾーン」と見なしてもよいはずである。しかし、本書で田中が指摘するように、「ある程度安定した人間関係あるいは社会関係」（p. i）から生まれる領域を想定することによって、本概念を用いる可能性は限定されてくる。その結果、どんなに密な身体的な接触でもこれが一時的である場合、コンタクト・ゾーンとして見なすことはできない。また親子関係のような長期的で恒常的な社会関係もコンタクト・ゾーンとして扱うことはできない。しかし「同じ家庭でも夫婦が異なる文化的背景をもっているならそこはコンタクト・ゾーン」（p. ii）となる。

このような概念の位置づけを理解したうえで、人文学において、本概念を用いる必要性と営み

Andrea DE ANTONI　京都大学人文科学研究所

とは一体何なのかを考えてみる。この問いに対する答えとして、田中があげるのは次の２点である。１点目はグローバリゼーション（地球化）に伴い、様々な文化的背景をもつ人たちの接触が急増している状況への対応である。２点目は、「人間社会や文化、そして人間性と呼ばれてきた人間の理念でさえ本来異質な他者との交流を通じて生まれてきたのではないのか」（p. iii）という認識である。編者たちは、この２点についてコンタクト・ゾーンという言葉を用いることで、「あたらしい世界のありかたやそれにどう関わればいいのか」（p. i）が明らかになると考えている。

では、『コンタクト・ゾーン』シリーズの中で、帝国主義における言説と支配・権力関係に注目する、プラットの『帝国のまなざし』に恐らくもっとも密接に関係していると思われる、本書のテーマの「ポストコロニアル」をコンタクト・ゾーンとして検討するとはどういうことになるのだろうか。これについての編者の考えは、本書の構成を一読するだけでも明らかになると思われる。本書に収められた 11 の論文は「生きる」という視点を共通点とし、それぞれの論文の対象によって、下記のように「〈日本〉」・「インド世界」・「ディアスポラ世界」、「新しい世界」という４部に分けられている。

第 I 部　＜日本＞を生きる
第１章　まなざしの呪縛――日本統治時代パラオにおける「島民」をめぐって――
三田　牧
第２章　「困難な私たち」への遡行
――コンタクト・ゾーンにおける暴力の記憶の民族誌記述――中村　平
第３章　「アメラジアンスクール・イン・オキナワ」に見る多文化共生社会への挑戦と課題　エイムズ・クリストファー＆エイムズ唯子
第 II 部　インド世界を生きる
第４章　アメリカ人が描いた二〇世紀初めインドの輪郭
――『マザー・インディア』を読む――小松久恵
第５章　トランスカルチュレイションとナショナリズム
――ガーンディーにおける身体と政体の自己統治（スワラージ）――田辺明生
第６章　インドにおけるポルトガル植民地支配と村落
――ゴア州のコムニダーデ・システムの現在をめぐって――松川恭子
第 III 部　ディアスポラ世界を生きる
第７章　スィク・ディアスポラから見える世界
――移住と信仰をめぐるコンタクト・ゾーン――東　聖子
第８章　フランス共和国と FGC 裁判――梅本響子
第９章　「クール・ジャパン」から拡がるコンタクト・ゾーン――サンフランシスコ日本町をめぐる文化創造とマンガ・アニメ産業――河上幸子
第 IV 部　創出――新しい世界を生きるために
第 10 章　明治インド留学生――興然と宗演――奥山直司
第 11 章　芸術がひらくオセアニア――レッド・ウェーヴ絵画におけるモチーフ／スタイルの共有と差異化――渡辺　文

つまり、理論的な概念や問題で論文を区分するのではなく、「世界」に焦点をあてることによって、場所や地域といった概念に基づき仕分けすることを編者たちは選択した。もちろんディアスポラの場合、植民地という場所ではなく、「かつての宗主国やそれ以外の地域」（p. xi）になる。「生きる」という観点を取り上げることによって、現地人自身の経験に着目するという選択もしている。なぜならポストコロニアルとは、植民地主義に対する抵抗や交渉、支配と文化価値の流用を表明する概念でありながら、「なによりも場所の経験 / 記憶であり、場所からの離脱の経験 / 記憶であるからだ」（p. vi）。この意味で編者たちは体験、記憶、場所という、３つの概念に注目し、コンタクト・ゾーンとポストコロニアルの関わりを検討している。

各論文を紹介する前に、注目したいのは第 I 部のタイトルの「〈日本〉」に〈　〉がついている理由である。それは、田中が指摘するように、第 I 部で扱っているのが「日本であって、日本ではない周縁的な世界」（p. vi）だからである。つまり、上記のコンタクト・ゾーンという概念の位置づけとポストコロニアルへの注目から、1945 年まで日本が支配した地域であるパラオと台湾、そして戦後アメリカによる支配が続いた沖縄が舞台となっている。

第 1 章（三田論文）はミクロネシアの西端に位置するパラオ諸島の住民たちに注目する。特に日本統治を子供の頃に経験したパラオ人の語りを分析し、「まなざし」という概念に注目しながら、アイデンティティの複数性と流動性を検討する。当時の小学校は、朝鮮半島、台湾、沖縄出身者を含む「邦人」と、南洋諸島の住人である「島民」に分かれていた。その結果、島民と邦人の子供たちが出会う機会がなく、もちろん友達のような関係を作ることもできなかった。ただし、同じ「邦人」の中でも、沖縄や朝鮮半島出身者たちは他の邦人たちと違うことも島民によって意識されていた。「邦人」間と、邦人と島民間の関係を検討することによって、本章はそれぞれの関係が不安定であることを示す。また、教育と「まなざし」という相互関係の中で「島民」としての自己や「日本人」「周縁的日本人」としての他者がいかに見出され、植民地における支配と権力が人間の生をいかに規定したかを解明する。

第 2 章（中村論文）は台湾の先住民族タイヤルが日本統治下で受けた暴力の記憶に注目し、それがポストコロニアルな現在に生きている、著者・読者を含む日本人にどのような影響を与えるかを考察する。そのため、著者は日本人教師による暴力についての語りを検討する。植民地支配が終わる前日に起こった、この事件によって、語り手の父親はケガをし、彼の友達は命を落としてしまった。この語りを考察しながら、著者は「『戦後』世代日本人の立場から、脱植民化つまり植民地統治に関する応答責任を、今記述し今読まれるという遂行的なプロセスにおいて取っていくという点」（p.50）に着目する。つまり、本章は一方で、アイデンティティを支配者と被支配者というような二分法的で所与的なカテゴリーに基づくと見なすのではなく、相互行為によって構築されることを示す。他方で、植民地支配と脱植民化に関わって現在についての民族誌の実践する日本人の著者と、これを読む日本人の読者とが、コンタクト・ゾーンにおいて記憶を構築する遂行的なプロセスを共有することを分析する。これによって、著者は台湾先住民と日本人をつなぐ新たな可

能性が開かれると論じる。

第3章（エイムズ・クリストファー、エイムズ・唯子論文）は現在の沖縄を舞台とし、在沖米兵と沖縄女性の子どもである「アメラジアンたち」を育むアメラジアンスクール・イン・オキナワの活動に注目する。アメラジアンは日本人でもアメリカ人でもない存在というだけではなく、沖縄の人たちからは、軍国主義を受け入れた証として、厳しくまなざされ、ときにはイジメも受けている。このスクールは、かれらを保護するために1998年に開校した。最初は無認可のフリースクールだったが、2004年にNPOによって民間の教育施設となった。本章ではスクールを支える「校舎」、構成員である生徒・関係者・ボランティア、スクールで行われる「ダブル教育」、経営に不可欠な「資金」を検討することで、アメラジアンの子どもたちのエンパワーメントと多文化共生社会における教育問題を考察する。つまり、学校で実践される教育を通じて、子どもたちはアメリカと沖縄について学び、まなざしを取り戻すことも学ぶと論じる。

「インド世界」を取り上げる第II部には、第4章から第6章が含まれる。第4章（小松論文）はアメリカ人女性ジャーナリスト、キャサリン・メイヨーが、英領インド社会について自国民に報告するために1927年に出版した『マザー インディア』を分析している。インド人からの反対はあったが、この本は出版直後から大きな評判になり、世界中で大ベストセラーになった。本章は『マザー インディア』をめぐる当時の議論を紹介したうえで、メイヨーが描いた支配的な英領インドの表象を分析する。メイヨーが繰り返し注目するのは、ヒンドゥー教徒の衛生観念の欠如、インド人の迷信にとらわれた非科学的な思考、女性をめぐる様々な問題、低カーストに対する残酷な扱い、インド人の利己的でモラルを尊ばない後進的な民族性である。その結果、メイヨーにとってインドは「イギリスの助けが必要であり、自治には適さない」（p. 91）社会なのである。

次に著者はメイヨーのインド表象の方法に注目する。そして彼女がイギリスとインドを過度に対比させているのみならず、自分の主張と矛盾するような社会改革運動、インド人主導の社会改革運動を扱っていないと指摘する。これによって、『マザー インディア』に描かれた公衆衛生、とりわけ性をめぐるトピックが過度にセンセーショナルになっていることに加え、文体もドラマチックであることから、本書には、読者をひきつける力があり、イギリスの植民地支配を正当化していたと論じられている。

第5章（田辺論文）はガーンディーの思想実践に注目し、トランスカルチュレイションという枠組みからインドのナショナリズムを再考する。大英帝国が代表する合理性、功利性、効率性に抵抗し、特に生命における食、性、健康法などの身体統御という実践倫理によって、「『生モラル』に基づくライフ・ポリティックスとしてのナショナリズムという、オルタナティブの政治倫理を実践的に提起した実践的思想家としてガーンディー」（p. 102）を捉える。筆者は、ガーンディーの思想実践をインドの伝統主義的な要素との繋がりではなく、むしろトランスナショナルな要素（特に神聖学協会）の影響に留意して解釈すべきと論じる。心身の清浄を保つというガーンディーの思想はインド、南アフリカ、ロンドンで生きることを通じて生まれ発展したもので、イギリス植民地支配の論理ともヨーロッパの自由主義思想に基づくナショナリズムとも異なると論じる。

第 6 章（松川論文）は 1510 年から 1961 年までポルトガルの支配下にあった、インド西部に位置するゴア州にある村落の土地共有制度共同体（コムニダーデ）を考察対象にする。ポルトガルによる支配から断続してきた共同体システムの成員は、共同で土地を所有・管理するガウンカールと呼ばれる人々である。かれらは村落の最初の定住者の子孫と見なされ、様々な権利を与えられてきた。しかしゴアは 1961 年のインドへの編入により、ポルトガル支配から解放される。これによって村落に導入されたパンチャーヤト制度がコムニダーデに大きな影響を与えることになった。この制度では、パンチャーヤトと呼ばれる村落の行政に関係する機関の構成員は選挙で決められる。本章はその選挙において、村落への帰属性と深く関わるコムニダーデのガウンカールなのかどうかではなく、キリスト教徒かヒンドゥー教徒かという宗教アイデンティティに基づく、対立軸が現れてきていることを明らかにする。

「ディアスポラ世界」に焦点を当てる第 III 部には、第 7 章から第 9 章が収められている。第 7 章（東論文）は北西インド、パンジャーブ地方で発展したスィク教を取り上げ、スィク移民に関する先行研究に基づき、世界中に散らばって生活しているスィク教徒のディアスポラを検討する。スィク教は 15 〜 16 世紀にパンジャーブ地方で広まった、ヒンドゥー教とイスラーム教から影響を受けた宗教である。スィク教徒は、18 世紀にイギリス植民地であったパンジャーブから、インド以外のイギリスの植民地へ移住し、後に北米、イギリス、東アフリカ、オーストラリアなどに移住した。本章はスィク・ディアスポラの全体像を示したうえで、移住先におけるかれらの個別の特徴や問題を考察する。こうして、スィクとしての共通性あるいはスィク教徒間に見られる差異、スィクとしての表象、体験の共有などを明らかにする。

第 8 章（梅本論文）はフランスに居住するアフリカ系移民における女性性器切除（Female Genital Cutting ＝ FGC）と呼ばれる身体変工をめぐる論争を考察する。FGC は従来、主にアフリカの一部とアラビア半島の一部などで実施されていたが、グローバル化による人の移動の結果、1970 年頃から欧米のアフリカ系移民のコミュニティでも実施されるようになった。これは単に文化の問題に留まらず、当事者の女性が命を落とす可能性がある実践である。そのため、移住先の欧米諸国の価値観と対立するものと見なされ、しばしば葛藤や論争を引き起こしてきた。

本章は 1970 年代後半から見られるフランス共和国における FGC 裁判を検討し、裁判をめぐる対立を通じてフランス社会における FGC への対応のあり方を考察する。フランスには FGC を対象とする法律はなく、既存の刑法を用いて対処されている。FGC が初めて重罪として扱われたのは 1988 年の裁判で、これ以降「FGC ＝重罪」という考え方が普及し定着した。また、1990 年代前後に FGC が表面化し、それを取り締まるため、法的規制が進められた。ただし、本章は従来、文化の実践だった FGC が重罪化されたことで、フランスに居住する移民たちが「犯罪者」、その子どもたちが「被害者」というようなラベルを貼り付けられてしまうことを問題視している。

第 9 章（河上論文）の主題は、サンフランシスコ日本町をめぐる文化創造とマンガ・アニメ産業である。本論集の中では植民地支配との関係がない唯一の論文である。ただし、

「グローバルな市場性にかかわる多文化的な趣味世界および業界主体の出現が、いかにローカルなレベルでのポストコロニアルな問題や、政策、開発、運動といった側面と連続性をもつ」（p. 206）かということに焦点があてられているため、本論集のポストコロニアルというテーマと連続しているといえる。

本章はアニメとマンガを中心とした「クール・ジャパン」に着目しながら、現代アメリカにおけるジャパンタウンと呼ばれる都市街区が日系商業施設の集積地区として生成、維持されてきた過程を検討する。2000年代前後から日本町の保存と再活性化が問題になったため、日系企業家たちは日本町での商売を戦略的にアニメと結びつけることになった。これによって2003年からアニメ愛好家たちの主導で「ジャパンタウン・アニメ・フェア」が始まり、2009年にはJポップセンターが建設された。その結果、白人オタクのみならず、台湾、香港、中国、韓国、シンガポールなどのアジア系の両親をもつ移民の若者が集まるようになった。このような若者の中には、単にアニメ・マンガの消費者に留まらず、インターネットやSNS（ソーシャル・ネットワーク・サービス）を通じて、日本で放映されるアニメを翻訳し配信したり、自ら日本風アニメやゲームを制作したりするような主体的な役割を果たす者もいる。活動の場を求めるかれらと、日本町をアニメで売り込みたい日系企業家たちの利害が一致したことで、日本町を中心としたマンガ・アニメにまつわるマルチ・エスニックな諸活動が展開されていき、アニメやマンガは日本の「超国家的なブンカ商品」として消費されることになった。

本章は、かつての日本による植民地の記憶や経験、イメージをアジア系の若者がトランスナショナルに世代間継承することと、日本町の商品の生産や消費とが関係していることを論じている。また、アジア系アニメ愛好家が「商品化され流通する日本的な文化イメージの生産機構を支える諸産業セクターにポストコロニアルなエイジェントとして組み込まれ（中略）産業化された文化創造の過程に」（p.223）関わり、広くアジア系のアニメ文化を構築していると論じる。

「創出――新しい世界」という名の、最後の第IV部には第10章と第11章の2本の論文が収められている。第10章（奥山論文）は、明治初期に仏教の原点を求めて大英帝国の植民地だったセイロン（スリランカ）に留学した日本の仏教徒を考察する。釈興然と釈宗演という二人の仏教徒を中心に、それぞれの経歴を紹介し、さらに日本の仏教徒とセイロンの仏教徒の相互的な関心に基づき築かれたネットワークが、かれらの留学を可能せしめたことを明らかにする。また、このネットワークの構築は「従来からセイロンと東南アジア諸地域の仏教徒の間に存在した連絡網が日本まで拡大しようという動きでもあった」（p.252）ことに光があてられる。

本章では、植民地に直接関係するトピックが扱われているわけではないが、セイロンが東西航路の要所だったこと、本航路の開発なしにセイロンへの渡航は想定されなかったこと、日本やセイロンの仏教徒がヨーロッパの学者の仏教観の影響を受けていたことなどが明らかにされる。そして、このような背景をもとに構築された、インド、セイロン、タイ、日本を含む仏教徒のネットワークが、欧米を中心に変化しつつある世界の影響を受けていたことが解き明かされる。

第 11 章（渡辺論文）は本論集の最後の論文で、フィジーのオセアニア・センターで進行するレッド・ウェーブ現代芸術に注目し、オセアニアに生きる人々の生活のイメージに基づく「集合的なオセアニア芸術」について考察する。オセアニア・センターはオーストラリア国立大学で人類学博士号を取得したエベリ・ハウオファによって 1997 年に設置された。ここは、センターの理念に従った、芸術の創造の核となるような「オセアニア」の構築と普及のみならず、創作の現場にも、他者に開かれた共同的な場にもなるべき場所である。また、オセアニア独自の美的基準を創出し、革新的であることが望まれる。

本章は個人主義的な作業であるはずの絵画制作と、センターで求められる集団性とのせめぎ合いによって、具体的な絵画が生まれていく過程を考察する。他人の絵に筆を入れるなどの行為に光をあて、主にモチーフとスタイルに特徴がある「オセアニア的なもの」がいかに構築されるかが検討される。さらに、他のアーティストがまねできないような個性が出現している動きも取り上げ、これがセンターの理念である集合的なオセアニア芸術の創出と競合してしまうことが明らかにされるが、そういった「個性」の出現によって、新たな芸術への可能性が開かれると論じる。

以上、各論文の紹介をしてきたが、最後に本論集全体についての個人的な感想を述べておきたい。様々な歴史的・地域的枠組みを対象としている、本書所収の 11 の論文は、それぞれの対象をコンタクト・ゾーンという観点から捉えなおすことによって、コンタクト・ゾーンという方法論的なツールがもつ比較という可能性を示した。のみならず、そのツールを用いて、各論文の話題を見つめ直すことによって、従来の議論の問題点に対する新たな視点、問題、解釈を提起しうる可能性も明らかになったと思う。これはコンタクト・ゾーンという概念と本論集が有する魅力だといえるだろう。

本論集は各論文がコンタクト・ゾーンという概念を用いながらそれぞれの話題を分析するような形になっているため、ある意味で本論集自体が「コンタクト・ゾーン」のコンタクト・ゾーンと見なすことができる。このように考えてみると、コンタクト・ゾーンとしての本論集の「遂行」について、個人的には多少の不満を感じるところがある。コンタクト・ゾーンという概念を用い、様々な枠組みを分析しているにもかかわらず、コンタクト・ゾーンという「言説」、その「支配」に抵抗する傾向があまり見えてこないのである。しかし、各論文は 1992 年にプラットが提唱した理論を問題化し、再考したり調整したりする可能性をもつ、相互行為による自他の構築過程、個人のエンパワーメント、支配、権力、政治、法律との関わり、表象、言説などの様々な観点が非常に理解しやすく提供されている。しかし、それらをまとめたり、「コンタクト・ゾーン」を再考したりする作業は読者に任せられているため、様々なアイデンティティや他者の構築過程に深く関わる「コンタクト・ゾーン」についての理論化は、結局は完遂できていないように感じた。

とはいうものの、コンタクト・ゾーンという概念を用いることによって、本書はポストコロニアルに関する様々な話題と議論に対し、広範囲にわたり、新たな焦点をあてることができたのは事実である。この結果、編者たちが目指していた「新しい人文学の形成」（p. iii）は成功していると考えられる。